

研究論文

「現代の食事作法—家庭の教育と新しい方向性—」

荒井 三津子・清水 千晶・中矢 雅明

Modern-day Table Manners : Home Education and New Trends

ARAI Mitsuko, SHIMIZU Chiaki and NAKAYA Masaaki

I. はじめに

経済企画庁が「もはや戦後ではない」と宣言してから50年、日本人の食生活は「豊かさ」を求めて「進化」してきた。外食産業の発展に続き、「中食」が注目されて久しい。「家族団らん」は神話に過ぎなかったのか、家族そろっての食事は少なくなった。食の簡便化が進み、孤食や個食などが問題視され、「共食の場としての家庭」の危機が叫ばれるようにもなった。それに伴って、「共食の場」を円滑に運営するルールである食事作法にも変化が生じてきた。

食事作法の変遷については、井上忠司・石毛直道編の「食事作法の思想」(1990)、および石毛直道監修の「食の情報化」(1999)、vesta(2001)が詳しい。上羽・古郡(2003)は本学の学生のマナーに関する実態調査を行い、学生たちがどのように食事マナーをとらえ、実践しているかを報告した。本稿は、本学の学生が家庭および学校給食の場面でどのような食事教育

を受けてきたか、また、周囲の食事環境をどう受け止めているかを調査し、現代の食事環境で守られる「ルール」や期待される「作法」の意義や機能について先行研究に照らしながら考察した。

II. 調査方法

本学健康栄養学科および理学療法学科の1年生187名を対象に次の調査を行った。

- (1) 日常、家庭で実際に行われている食卓での教育を把握するために、次の①から③について記載させた。その際、調査側の先入観を排除するために、選択式ではなく、完全な記述式を採用し、複数の記載を許可した。
- ①幼少期から食事中、家族に注意されてきたことはなにか。
 - ②他者と食事をするとき、気になる点はなにか。
 - ③小学校、中学校時代の学校給食時、教師か

ら注意されたことは何か。

(2) わが国の食卓で特徴的に交わされる挨拶である「いただきます」と「ごちそうさま」がどのように守られ、継続してゆくかを考察するために、健康栄養学科と理学療法学科の1年生合計205名に④と⑤の質問に回答させた。

④一人で食事をするときも「いただきます」と言うか。

⑤「いただきます」と言うとき手を合わせるか。合わせる人はその理由はなにか。

(3) 学生たちの食作法に対する考え方を知らため、「食卓のマナーはなぜ必要だと思うか」というテーマで記載させた。

(4) 現在出版されているマナー関連の書籍やマナーに関する特集記事を掲載している生活情報雑誌が、どのような内容について詳しく取り上げているかを調査した。

(5) ①から⑤までの調査結果をもとに、食卓の諸作法の歴史や文化に詳しい専門書にあたり、今日守られている食卓の作法の意義や機能について考察した。

Ⅲ. 結果

Ⅲ-1. 家庭の「箸教育」

今回の調査で、187名中97名以上の学生が食卓で箸の持ち方を注意された経験があることがわかった。調査は記述式のため、箸に関しても複数の回答があった(表1, 2)。

表1) 親から注意された箸のタブー

キーワード	人
渡し箸	21
寄せ箸	12
刺し箸	11
迷い箸	4
ねぶり箸	3
さぐり箸	1

表2) 家庭での箸の使い方に対する注意

キーワード	人
箸で食器をたたかない	16
ご飯にお箸をささない	9
直箸をしない	6
箸先を他人に向けない	3
大皿・鍋の時に箸を返す	3
嘯まない	2
その他	4

上羽等(2003)が行った食事マナーのイメージ調査によれば、122人中83名が「箸の使い方」をあげている¹⁾。今回の調査結果も50%以上の学生が箸の使い方についてなんらかの注意をされてきたことを示した。

向井・橋本(2001)は、箸の持ち方を「伝統型」、「鉛筆型」、「その他の型」の3つに大別し、従来の伝統的な箸の持ち方を「正しい持ち方」としている。しかし1989年に行った調査結果では伝統的な箸の持ち方をしているものは152名中53.9%、1990年の調査では235名中46%であったことから、伝統的な、すなわち正しい持ち方の割合が低下する傾向にあること指摘した²⁾。向井等は、幼児期から箸よりスプーンやフォークを使う食事をし、伝統的な箸の持ち方を家庭で教えていないことが影響していると述べているが、本稿の調査は向井等の調査から15年たつが、箸の使い方を注意する親は50%を超えている。幼児に対しても、箸を正しく持つための特殊な幼児用の箸(図1)や矯正用の箸が販売されており、若い母親の関心を集めている。箸に対する意識が低くなっているとは言えない。

また、向井等は、「伝統的=正しい(本稿解釈)」箸の持ち方をする短大生の90%が7歳までに箸の持ち方を学んでいることを報告し、短大生くらの年齢になると自分の箸の持ち方が他人と比べて変わっていることに気づき、箸の持ち方に関心をもつようになると述べている。本研究

の調査でも学生自身が他者と食事をしていて気になることとして「箸の持ち方」に関する事項をあげた者は44名いた（表3）。家庭でフォークとナイフの注意を受けた学生は2名しかいなかったことから、外食ではスプーンやフォークの使用が増えても一般家庭での使用は少なく、箸への関心ははるかに高いことがわかった。



図1) 幼児用トレーニング箸

表3) 他者との食事中気になる箸使い

キーワード	人
箸の持ち方	27
直箸	7
箸をなめる	3
器を箸で寄せる	2
箸を落とす	1
箸をくわえる	1
食器をたたく	1
迷い箸	1
箸で人を指す	1

Ⅲ-2. 正しい姿勢

上羽等の食事マナーのイメージ調査の結果では、122人中39人が「正しい姿勢」をあげ、69.6%が「姿勢を正して食事する」というマナーを実践していると答えている。本調査でも、椅子の座り方や脚の位置、姿勢、手の位置につい

て親たちはさまざまな注意をしていることがわかった（表4～6）。以下、脚の位置、左手、肘について調査結果をまとめた。

表4) 椅子の座った時の脚の位置

キーワード	人
膝を立てない	45
あぐらをかかない	17
脚を組まない	13
脚をひろげない	2
脚を振らない	1

表5) 姿勢・動作

キーワード	人
姿勢良く	19
貧乏ゆすりしない	9
猫背	3
正面を向いて食べる	2
体を揺らさない	1
モノを取る時は腕まくりしなさい	1

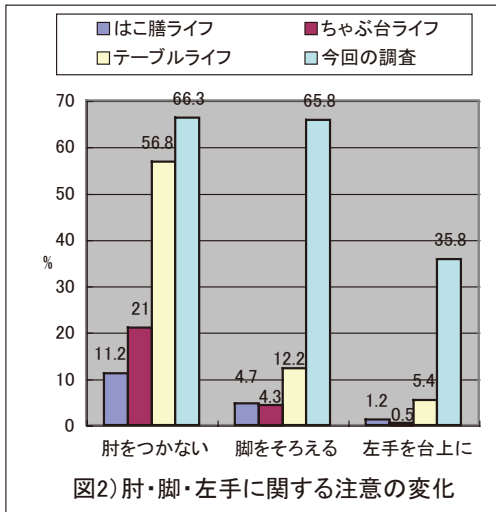
表6) 肘・手の位置

キーワード	人
肘をテーブルにつかない	124
左手で器を持つ	47
左手を使いなさい	10
左手をテーブルに出して	9
手の位置を気をつけなさい	1

Ⅲ-2- (1) 足の位置と状態

わが国の食卓は時代とともに、膳、ちゃぶ台、ダイニングテーブルと形式を変えてきた。井上等（1991）は「はこぜんライフ」、「ちゃぶ台ライフ」、「テーブルライフ」と時代を分け、それぞれの食卓の姿勢に関するマナーを調査した³⁾。1991年の結果と今回の調査結果を合わせて作図したものが図2である。今回の被験者の多くはダイニングテーブルを使用する「テーブルライフ」だと判断し、井上等の1991年の結果と比較した。1991年は「脚をそろえる」という項目が12.2%、今回の結果では「脚をそろ

える」という回答はなかったが、より細かい具体的な姿勢として「椅子の上で膝を立てない」が45名、「椅子の上であぐらをかかない」が17名、「脚を組まない」が13名など、合計75名(65.8%)がダイニングテーブルでの「脚の位置」を注意されている。



石毛直道・井上忠司〔編〕1999「現代日本における家庭と食卓」国立民族学博物館研究報告別冊16号参照

Ⅲ-2-2 (2) 肘と左手の位置

「肘をつかない」という答えは1991年56.8%だったが今回の結果では66.3%と高かった。

左手に関しては、1991年の調査では「左手を台より上に」というのが5.4%だったが、今回の調査では「左手で器を持ちなさい」が47名、「左手を使いなさい」が10名、「左手をテーブルに出しなさい」が9名、「左手の使い方に気をつけなさい」が1名いた(表6)。35.8%が左手の使い方を注意されている。

Ⅲ-3 食卓でしゃべるといこと

井上等が1991年に行った調査で「食事中話をしてはいけない」という回答は、はこ膳ライフ世代は83.3%、ちゃぶ台ライフ世代は32.4%、テーブル世代は5.0%だった。それに

対して今回本学の学生を対象に行った調査では、「口に食べ物を入れたまましゃべってはいけない」が40名いたが、口に入っていないければ食事中話をすることは問題にはなっていない。食卓で話すこと自体がだめだという回答は187名中5名だった(表7)。

表7) 食べながらやってはいけないこと

(3名以上の項目)

キーワード	人
口に食べ物を入れたまましゃべってはいけない	40
携帯電話	39
新聞・漫画などを読みながら	12
寝転がらない	9
歌わない	9
不適切な話をしない	5
しゃべらない	5
けんかしない	3

Ⅲ-4 ○○しながら食べること

表7から、他の行為をしながら食べることにに対する抵抗が多いことがわかった。「携帯電話の使用」は39名、「新聞や雑誌、漫画などを読みながらの食事」を注意された者は12名いた。他者との食事で気になることの一位としては、44名が「タバコを吸いながら」をあげた。二位が「携帯電話」で21名、新聞や本を読みながらというものは10名いた(表8)。

表8) 他者との食事中の嫌な態度 (5名以上の項目)

キーワード	人
タバコを吸う	44
携帯を気にする	21
文句を言う	16
大声で騒ぐ	15
新聞・本を読む	10
無表情・無言	9
しゃべる	8
下品な話	8
不適切な話題	7

テレビに関しては、興味深いデータを得た(表9)。テレビを見ながら食事をする傾向について問題視されて久しいが、「テレビを見てはいけない」と禁じられた家庭は187名中わずかに5軒だった。「テレビを見てはだめ」と言いながら消さないのが31軒、「テレビに集中しないように」という注意が20軒、姿勢よくテレビを観るように注意されたという学生も1名いた。

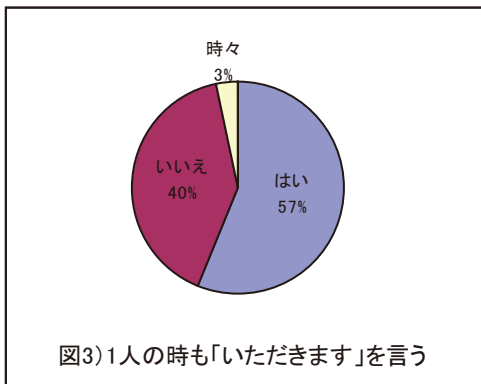
表9) 食事中のテレビについて

キーワード	人
見ないように注意	31
テレビに集中しない	20
絶対にだめ	5
姿勢よく見なさい	1

Ⅲ-5 食卓の挨拶

食前のお祈りや乾杯など、食事をスタートさせるときの挨拶は広く世界中で見られる。わが国の「いただきます」ものその一つである。今回の調査でも40名が「いただきます」、「ごちそうさま」を言いなさいと注意されたと答えている。

本調査では学生に一人で食事をするときも「いただきます」と言うかと質問をした。その結果、205名中115名(57%)が言うと答えた(図



3)。「いただきます」というとき、手を合わせるかという質問に対しては72名(35%)が合わせると答えた(図4)。その理由の一位は「なんとなく」であったが、二位が「作った人や材料の動物や植物への感謝」と「習慣だから」というものだった(表10)。

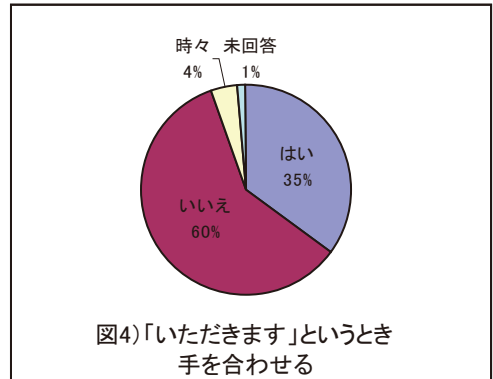


表10) 「いただきます」というとき手を合わせる理由

キーワード	人
なんとなく・くせ	21
感謝の気持ち(作った人や動物・植物へ)	17
習慣	17
そうするように教わったから	7
礼儀だから	4
無意識	3
親のマネ・親に教わった	3
一緒の時間に食べ始める合図	2
宗教的な理由	2
学校給食でそうしていたから	2
理由はわからない	2
手を合わせるものだと思うから	1
日本人が昔からやっていることだから	1

Ⅲ-6 「残す」ということ

今回の調査では学校給食で注意されたことについても記述してもらった。その一位が「残さない」だったが、家庭においても「食べ物を残さない」が31名、「ご飯を残さない」が25名、「ご飯粒を残さない」が31名いた(表11)。「ご飯」

とは別に「ご飯粒」と答えた学生が多かったのは特記すべきである。他者と食事をするときも9名が「ご飯粒を残す」のが気になると答えている(表13)。

表11) 残すということ

キーワード	人
食べ物を残さない	31
ご飯粒を残さない	31
ご飯を残さない	25
手をついたら最後まで食べる	1

Ⅲ-7 食べる様子

椅子の座り方や手の位置などの姿勢とは別に、具体的な「食べ方」について、「がつがつしてはいけない」、「犬食いはいけない」など、いわゆる「行儀の悪い」食べ方を禁じ、「おいしそうに」、「たのしそうに」と指導している家庭が目立った(表12)。表13は学生が「見ていやな食べ方」を示している。

表12) 食べる様子(家庭での注意)

キーワード	人
早く食べなさい	14
犬食いだめ	4
がつがつ食べない	2
おいしそうに	2

表13) 他者との食事で気になる点

キーワード	人
食べるときくちゃくちゃ音をたてる	95
こぼす	25
食器の音をたてる	15
ご飯粒を残す	9
かきこむ	3
犬食い	2
がつがつ	2
落としてもひろわない	2

Ⅲ-8 身体・生理的嫌悪

家庭では食卓で「げっぷをしない」、「鼻をか

まない」、「しゃっくりをしない」という注意が合計4名だった。それに対して、学生自身が他者と食事をしていて気になることとしてあげたのは、「げっぷ」、「爪楊枝を使う」がそれぞれ10名、「つばをとばす」が9名、「鼻をかむ」が6名、「咳・くしゃみ」と「髪をさわる」が各4名、「おなら」と「痰」が各2名いた(表14)。家庭では特に言われなくても、若い世代は身体的生理的な衛生意識が強いことがわかる。

表14) 身体・生理的嫌悪

キーワード	家庭(人)	現在(人)
げっぷ	2	10
爪楊枝を使う	—	10
つばをとばす	—	9
鼻をかむ	1	6
咳・くしゃみ	—	4
髪をさわる	—	4
おなら	—	2
痰	—	2
しゃっくり	1	—

Ⅳ. 考察

Ⅳ-1 食卓のしつけは消えていない

熊倉(1987)は対談で、ダイニングテーブルの登場に着目し、「ちゃぶ台がなくなり、しつけの場としての食卓が消えた。それはちょうど高度経済成長期で、父親は夕食の時間に帰って来ない。正座もしなくなるし、肘をついたりとか、嫌い箸とか、そういうタブーが一切なくなる。」⁴⁾と述べているが果たしてそうだろうか。今回の結果から、現在、箸の使い方へのこだわりをはじめ、「脚をきちんと」、「肘をつかない」、「左手を使う」、「米粒まで大切に」など、家庭は細かく指導しており、食事作法の質を低下させていないことが明らかになった。食事の時間が家族でまぢまぢになり、内容も大きく変

わってきたが、古くから守られている箸使いへのこだわりはそのまま維持され、脚や手、肘についての指導はちゃぶ台時代よりむしろクローズアップされてきた。

しかしながら、家庭間で、食事作法の指導力に違いあることは充分予想される。食べ物や住まいの差は、当然、食事作法をどの程度重視するかという差にもあらわれてくるだろう。「行儀」に寛大な家庭と厳しい家庭の格差に関する調査は今後の課題としたい。

Ⅳ-2 作法の混乱と踏襲

ダイニングテーブルの椅子の座り方や脚の位置については、これまで食事の作法として語られてこなかった。だがちゃぶ台からダイニングテーブルに変わったことで脚は「自由」になり、椅子の上で立ち膝をしたり、あぐらをかくことなど「和洋折衷の姿勢」も見られるようになった。ライフスタイルがほぼ西洋化したにもかかわらず、多様な座り方が見られることは興味深い。「椅子の座り方、脚の位置に注意すること」というのは、「テーブル時代」になってから生まれた新しい食空間の作法と言えよう。

左手についての留意も同様である。ダイニングテーブルは食器と口の距離を近づけた。そのため、必ずしも器を持ち上げる必要はなくなったにもかかわらず、親たちは「左手を使うこと」、「食器を持つこと」にこだわっている。「テーブル時代以前」の作法を踏襲しているのである。箸が片手しか使わない食具である以上、器を持ち上げない限り左手のやり場はない。片手で作業をすることの「無作法感」もあり、今後も「左手」へのこだわりは消えないと思われる。わが国特有の小さい器の存在も、この踏襲を支えていると考えられる。箸使い同様、「左手の作法」が新しいマナーとして取り上げる必要があるかもしれない。

Ⅳ-3 身体感覚から生まれる作法

くちやくちや音を立てて食事することに対する嫌悪感は大きかった（表13）。食事中、話をするに関しても「話」そのものがいやなのではなく、口の中や食べ物が見えることが問題であった。「口のまわり」に対する清潔感が求められる時代になったと言えよう。単に「話をしてはいけない」というのと「口に物を入れたら話してはいけない」というのは異なる。後者の場合はしゃべることが問題なのではなく、「物が入った美しくない口」が問題なのである。視覚的な問題であるだけでなく、口から食べ物が飛び出す危険もあり衛生的な視野に立った新しいマナーとして注目されてゆくだろう。

「げっぷ」、「咳・くしゃみ」、「爪楊枝の使用」への抵抗感も同じ感覚である。家庭では見過ごされても、若い世代は不快感を示している。興味深いことは、彼等が不快に思う事柄は西洋のテーブルマナーではすでにタブー視されている事柄だという点である。日本の食卓の作法の多くは所作、すなわち「形」に注目してきたが、今後は「見えない作法」や「エチケット」がクローズアップされてゆくと思われる。西洋の食卓作法が生理的な感覚として徐々に若い世代に浸透してきたことは注目に値する。

Ⅳ-4 宗教観と作法

「箸のタブー」の歴史は古い。「貞丈雑記」（1843）に見られることは知られているが、織田信長がカトリックイエズス会のルイス・フロストと食事をした際、「箸の七不作法」を教えたという説は子供用の図書にも記載されている⁵⁾。現在も「マナー本」の多くが和食の作法の一つとして取りあげている。

明治以降、洋食を受け入れて以来、中華料理、エスニック料理と、わが国の食生活は多様化し、家庭での調理の幅も増えた。にもかかわらず日本古来の食具である箸へのこだわりは根

強く残っている。箸は家庭のごはん茶碗や湯のみ同様、「〇〇さんの箸」と言うように、個人に属する。これは日本の特異的な現象として注目される。使い捨ての割り箸も材質だけでなく形やサイズの種類も多く、正月には祝い箸が売られるなど、箸への関心は大きい。

外食では料理の内容に合ったナイフやフォーク、蓮華などの食具が並ぶが、一般家庭では料理の種類にかかわらず箸を使うことが多い。今回の調査でもナイフやフォークの使い方を家庭で注意された、という回答はわずか2名しかいなかった。

箸は神の依り代として古くから神聖視されてきた。古来、祭祀に供える神饌は手で直接触れることなく、箸を用いて盛り付け、改めて新しい箸を添えて神前に供えた。祭祀のあと神の依り代である箸を用いて氏子に神饌が分け与えられる。この儀式において箸が果たしてきた役割は大きい。幼い頃から自在に箸をつかうことを教育される中で、「食は神とともにあり」すなわち「神人共食」の架け橋である箸を神聖視する意識も知らず知らずのうちに植えつけられているのかもしれない。箸が食べることを以外に用いられることへの嫌悪感も箸を神聖視すればこそであろう。

箸への関心だけでなく、日本の食作法の成立には仏教や儒教、禅宗、茶の湯の影響があり、形式が重んじられてきた。禅宗の規範である「いただきます」と「ごちそうさま」が、現在まで変わることなく習慣として採用されつづけ、48名が何らかの感謝の気持ちを込めて手を合わせるという結果(表10)は、礼儀作法が希薄になったと危惧される昨今、大変興味深い。

IV-5 羞恥心と緊張感

なぜ姿勢をよくして食べなければならないのだろうか。食べるという行為は本来、就寝、排泄などと同様、無防備な状態で行われるため、

人目につかないように行われてきた。食べている口を見られることは恥ずかしく、無礼だと感じるのは日本人だけではない。韓国では、年長者の前では口をかくす。R.ワトスン(1974)は「食物の調理とか摂取にはまわりへの警戒心がゆるみ、危険をとまなう。たいていの動物は緊張感のまま食べる」と書いている⁶⁾。吉田(1990)もいわゆる未開社会の人々にとって隠れて食事をするのが普通だったと記し、いつのまにかオモテの行動になったため、食べるという行為には決まって羞恥心をとまなうようになったと説明している⁷⁾。羞恥心は広く人類が有するものだが、とりわけ「他人」と「世間」を意識する日本人には大きな問題なのかもしれない。ワトスンの言う「警戒心」は姿勢を正すことを促す。他者を意識し、緊張感をもって食事をする、この考え方が「正しい姿勢」を要求するひとつの要因ではないだろうか。

IV-6 「美しい」ということ

井上(1990)は「作法の基準は善悪の問題にあらずして、美醜の問題であるということである。したがって、作法は道徳の問題としてあつかうのではなくて、むしろ美意識の問題である。」と述べている⁸⁾。この視点から言えば、「正しい姿勢」とは「美しい姿勢」ということになる。山根(2004)は人間の姿を「美的」と「非美的」に分けて「行儀」を説明している⁹⁾。図5は山根が分類した「電車内の姿勢」を参考にして食卓の姿勢を作図したものである。この図からもわかるように、「美的」とされる姿勢は体軸から大きく揺れない「緊張感」のある姿勢である。脇、脚が不用意に開かず、他の動作を同時に行わない姿勢である。「肘をつくこと」は「非美的」ということになる。だが、この緊張状態を維持するのは容易なことではないため、他者の眼がない場所では必ずしも守られていない。かつて多くの日本の家庭には「他人」がいた。熊

倉（1987）は1960年以降、「他人」が家庭から排除され、そのころから家庭の日常作法が失われ、食事作法の必要性が「世間」へ移ったと指摘している¹⁰⁾。井上（1977）は他人にも二通りあり、「アカノタニン」と「自分にかかわりのあるタニンとこれからかかわる可能性のあるタニン」があり、作法を考える場合は後者のタニンを意識しているのだと言う¹¹⁾。「家庭」であれ、「世間」であれ、わが国の食事の場面では常に「他者の眼」が意識されてきたことは間違いない。他者を意識するとき、「美しく」、「正しく」あらねばならないのである。

Ⅳ-7 食卓での会話

青木玉著の「小石川の家」は、わが国の家庭のしつづを論じるとき、頻繁に取りあげられ参考にされる。作者が祖父幸田露伴にきびしくしつけられた様子が記されている。孫娘に露伴は「口数の多きは卑し」と語っている¹²⁾。夕食時はあぐらをかいた露伴も朝食のときはきっちり座ったというから余計なおしゃべりは許さなかったに違いない。

兼高（2001）は、子供時代、食卓ではしゃべってはいけないと教育されてきたと述べているが世界中を旅した経験から、食卓でのおしゃべりの禁止は決して各国共通のものではないと報告している¹³⁾。M.Wスティールも兼高等との座談会でイギリスでは子供はしゃべってはいなかったこと、下品な話題など話題も選ばれたことを述べているが、食卓での会話が禁じられていたとは言っていない。食卓でしゃべってはいけないという作法は古き日本の特徴的な作法かもしれない。ではなぜ、食事の会話は禁じられたのだろうか。平安時代の「衛生秘要抄」には「食上不得語、語而食者常患胸背痛」とあり、食事の席で話しながら食べると体に痛みを伴うと忠告しているが、この平安時代の食事作法が実は現代まで影響していると、橋本等は指摘する²⁾。禅宗の修行においては今も食事の会話が禁じられている。宗教的な背景について詳しく論じることは本稿の目的ではないが、「食は神とともにあり（神人共食）」とする民族意識が存在し、食べものを神仏に供えて、静かに黙々と食べるのがよいとされてきたのは事実で


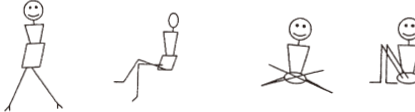

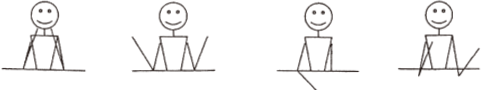
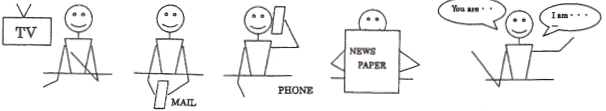


	美 的	非 美 的
脚		
手・肘		
〇〇しながら	—	
姿 勢		

図5) 食卓の体勢

ある。また、物理的な側面から考えても、個人用の膳を用いる食事形態であれば、和気あいあいという状況は作りづらく、個々が黙々と食べる場面が多くなったのは当然であろう。

だが、今回の結果から食卓でしゃべることは容認されつつあることがわかった。しゃべってはいけないのは口に食べ物が入っている場合であり、これは「視覚的」、「衛生的」という別の問題であった。時代は確実に変わった。食卓は楽しく食事をする場として期待されるようになった。その流れの中で孤食や個食の問題が生じてきたことは想定外だったと言えよう。「コミュニケーションの場としての食卓」は、幻想なのか、また、どのように実現してゆくべきかは今後の大きな課題である。

IV-8 「〇〇しながら食」の肯定

ポケベルに始まり携帯やモバイルなど若者文化に詳しい藤本(2001)は「〇〇しながら」の若者の生活に着目して多方面から論じている。インスタントラーメンとポケベルが誕生した1958年生まれの藤本は自らの世代を「即席＝ポケベル」世代と名乗り、子供のころから「無作法」、「行儀が悪い」と言われつづけてきたと振り返る。1968年の流行語は「ながら族」であった。ワンマンバスの登場、映像、音声など多様なマルチメディアの並列処理システムが開発されたのもこの時期だった。藤本は「行儀の悪い『ながら』無礼講は、いつしかカッコイイ『モバイル』ファッションに名前を変える。会話したり移動しながら、手のひらサイズの端末に電話をつなげて、情報をやりとりするファンションが賞賛される現代。」と語る¹⁴⁾。

タバコや携帯電話、新聞や雑誌などを持ち込んだ食事は嫌われる。だが一人で食事する場合、あるいは親しい人間同士で食事する場合はすでにこれらの「ながら食」は容認されている。食卓では天敵のように扱われるテレビも、現実

その位置を完全には否定されていなかった。セルフサービスの店の台頭をはじめ、時代が「ながら食」のステージを作ったのである。テレビやパソコンなどを取り込んだ食卓が肯定される時代はすでに始まっているのかもしれない。「ながら食」のための新しいマナーの誕生が期待される。

IV-9 「ごはん粒論」－生きている家庭教育と若い世代の意識

今回の調査結果の一つに興味深いものがあった。「ご飯粒を残さない」という回答が多かったことである。単にご飯を残さない、というのではなく、「ご飯粒」にこだわっている点が注目される。「ご飯粒」は我々日本人にとってどのような意味を持つのだろうか。

日本人の主食は「米」とされているが、白米を食べていたのは限られた人だけだった時代が長い。瀬川(1968)は江戸時代、地方の一般庶民はまだ「黒い米」を食べていたのではないかと推察し、米ばかりを食べるのは盆と正月と折々の物日に限ったと述べている¹⁵⁾。白い米粒を大切にする気持ちは古くから人々の気持ちにあったと考えられる。志賀(1980)は明治を生きた祖母の言葉をあげ、「食べ物を粗末にすると『眼がつぶれますぞ』と言われ、釜やお櫃を洗って、めし粒を一つ残さず四本指で掬って食べたこと、『お米は人に食べられることを命として生まれてくるのですえ、一粒を粗末にする者は必ず一粒のお米に泣く』と言われた」とふりかえる¹⁶⁾。一粒のお米も大切にするという思想は広く日本人の気持ちの中にあっただのである。脆弱になったといわれる家庭教育だが、食卓においては「小さい一粒のお米」を意識する古き思想が伝えられていることに着目したい。

表15) 食卓のマナーはなぜ必要だと思う？（複数回答）
（5人以上の項目）

キーワード	人
人に不快感を与えないため	70
気持ちよく食べるため	42
楽しく食べるため	29
おいしく食べるため	29
恥ずかしくないように	29
食事をする上での基本であるから（常識）	26
見た目（きれいにみえる・世間体・人目）	21
感謝の気持ちを表すため（作った人へ等）	13
人間性が表れるため	10
人に迷惑をかけないため	9
普段の生活につながるから	9
伝統（食文化）であるから	8
礼儀であるから	8
ルールがないとだめだから	7
人間関係（集団生活）を円滑にするため	5

Ⅳ-10 食事作法の目的と機能・そして可変性

食卓のマナーはなぜ必要かという質問に対しても、205名中70名が「人に不快感を与えないため」と答えた。「気持ちよく食べるため」、「楽しく食べるため」、「おいしく食べるため」、「恥ずかしくないように」などが続いた（表15）。

若者の個人主義が危惧される中、他者を気遣う傾向が食卓に見られることは特記したい。

今回の調査結果から、時代が変わっても姿勢を正しく、美しく、行儀よく、という食卓での教育は決して減少する傾向にはないことがわかった。ブリア・サヴァランが「禽獣は喰らい、人間は食べる。教養ある人にして初めて食べ方を知る」と言ったのは周知のことである¹⁷⁾。西洋のマナーは17～18世紀、ブルジョワジーが貴族の生活を真似て作り上げたといわれる。地位が下の階級の人たちが自分たちのルールを真似るようになると貴族はさらに複雑なルールを作り、その繰り返しが、いっそう複雑なマナーを生んできたプロセスも知られている。兼高は

「いまでもむしろ貴族じゃないほうが一生懸命気取って形をつくりますからね」と語る¹³⁾。新渡戸（1938初版）も「教養ある人は当然すべてこれらの事に通曉せるものと期待された。ヴェブレン氏がその快著の中に、礼儀をば『有閑階級の生活の産物であり、象徴である』といえるは誠に適切である。」と述べている¹⁸⁾。このように、行儀よく・美しく食事することは「教養のある人」である証拠とされてきた。この思想は現代も生き、母親達は「野蛮な食べ方ではなく、優雅に食べなさい」と子供に言い続け、子供達もそれに従うことが社会に出てステイタスを生むことを知っているからこそ、そのルールと指導に従うのである。家庭間の作法教育の格差が広がることは予想されるが、食事作法が衰退することはけしてないだろう。そして新しいマナーも次々に生まれてくることが期待される。

マナーは可変的なものである。西洋のナイフやフォークも、現在の形になったのはごく最近のことである。現在のフランス料理のテーブルマナーはロシア式のサービスを取り入れたものとされるが、個人用の器の普及や手食への抵抗感、衛生観念などとの総合的な関係から徐々に進化した作法である。食事の作法は国、地域、家庭によって異なり、時代の流れにも影響される。普遍なものとして古い作法にこだわるだけでなく、『快適な食空間』をすすぐため」という共通の認識を持ち、柔軟に新しい作法を生み、育ててゆく姿勢が必要であろう。食育の指導方法が具体的に検討される中、新旧の食作法について、学際的に広く検討することを今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 上羽緑・古郡曜子「本学学生のマナーに関する調査（1）—食事マナーについて—」北海道文教大学短期大学部研究紀要第27号、

2003

- 2) 向井由紀子・橋本慶子「著」法政大学出版, 2001
- 3) 井上忠司「『食事空間と団らん』講座食の文化 第5巻 食の情報化」味の素食の文化センター, 1999
- 4) 熊倉功夫「井上俊編『風俗の社会学』」世界思想社, 1987
- 5) 都築二郎「生活の基本図鑑1家庭」大日本図書, 1999
- 6) R.ワトスン著／餌取章男 訳「悪食のサル食性からみた人間像」河出書房新社, 1980
- 7) 吉田集而「『食事作法の思想』井上忠司編・石毛直道編」ドメス出版, 1990, pp93
- 8) 井上忠司「『食事作法の思想』井上忠司編・石毛直道編」ドメス出版, 1990, pp16
- 9) 山根一郎「作法学の誕生」春風社, 2004
- 10) 熊倉功夫「井上俊編『風俗の社会学』」世界思想社, 1987
- 11) 井上忠司「世間体の構造」NHKブックス, 1977
- 12) 青木玉「小石川の家」講談社文庫, 2004
- 13) 兼高かおる「vesta (食の文化誌)」味の素食の文化センター, 2001, No.51
- 14) 藤本憲一「vesta (食の文化誌) 若者の食行動にみる『ながら』『情報化』『悪食』—『ラッコの食卓』」味の素食の文化センター, 2001, No.41
- 15) 瀬川清子「食生活の歴史」講談社, 2000〔初版1968〕
- 16) 志賀かう子「祖母、私の明治」河出書房新社, 1985
- 17) プリア.サヴァラン著／関根秀雄 訳／戸部松実 訳「美味礼賛 上・下」岩波書店, 1992〔初版1967〕
- 18) 新渡戸稲造「武士道」岩波書店, 1997〔初版1938〕

(2007年1月25日受稿)

Abstract

It is said that there has been a decrease in time spent among family members during meal time and in awareness with regard to table manners at home. However, this is not the result of decreased emphasis placed on the use of chopsticks, seating etiquette, proper posture when eating, and the correct use of table ware. New issues have arisen related to the proper use of cell phones, televisions, and toothpicks during a meal. In accordance with the results of our survey of students, we have given thorough consideration to modern-day table manners, their traditional roots, and future direction.